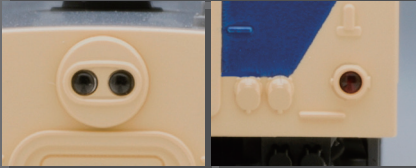




●ハイグレード仕様のモデルは、前後ともにボディマウント式密閉連形TNカバー（SP）を取り付け、前頭部周りの選択式別パーツとして、屋根上の無線アンテナと前面のジャンパホース（写真では未取り付け）、灰色の幌枠、エアホースを吊るすチェーンの他、踏切事故対策として取り付けられた前面補強板（塗装済み・500番代のみ）が付属します。新たに再現した段付きのソーラービーム2灯式ヘッドライトと、外はめ式テールライト、そして前面表示の点灯には電球色LEDを使用、カラープリズムによってテールライトは赤色で、前面表示は白色に近い色で点灯し、これらは床下の「ON-OFFスイッチ」により、点灯、消灯を選択できます。なお、運転台内部の遮光ケースに取り付ける前面表示は、印刷済みパーツによる選択式とし、写真の「茅ヶ崎-橋本」を装着、交換用として6種を付属します（\*）。写真は上左からキハ30形、キハ35形の前頭部です。



※両セット共通  
「茅ヶ崎-海老名」「茅ヶ崎-寒川」「橋本-厚木」  
「橋本-原当麻」「普通（白地）」「臨時」



●両セットともに、0番代は前面補強板が無い姿を、500番代は補強板が付く姿で作り分け、補強板の有無により異なる前面塗装を再現しています。また、500番代の特徴となる角形ベンチレーターは屋根とともに新たに製作、それぞれの屋根（キハ35形は下周りも）を組み換えることにより、前面補強板が付く0番代と前面補強板が無い500番代にすることができます。なお、補強板付きの設定は付属の補強板パーツを取り付けることで前面の青色が再現できるようになりますので、購入時の前面はクリーム1色となります。

●両セットの500番代床下の水タンクは、0番代の丸みを帯びたタイプとは異なり、キセが取り付けられ角張ったタイプを新たに作り、取り付けています。トレーラーでは、既製品と同様、両方向に排風可能な風道や放熱フィンを実際に模したラジエーター、シリンドリッドヘッドを始めとして細部まで再現した別パーツのDMH17H形エンジンなど、ディーゼルの魅力である床下周りを実感的に作り上げています。また、いずれも前位側台車の排障器は、台車枠と一体で成型しています。



キハ30形（相模線色）2両セット



キハ35形（相模線色）2両セット

国鉄キハ35系ディーゼルカーは、1961（昭和36）年に登場した一般形ディーゼルカーで、前面切妻形の車体とされた同系は、都市近郊非電化線区での混雑緩和を目的に、外吊り方式の両開きドアを片側3ヶ所に設けました。キハ35系は両運転台のキハ30形、片運転台、トイレ付きのキハ35形と片運転台、トイレ無しのキハ36形の3形式413両が製造され、同年12月より関西本線で営業運転を開始、その後、首都圏、新潟地区、四国・九州地区にも導入され、新潟地区に配置されたキハ30形とキハ35形は寒地仕様となり、番代が分けられました。首都圏非電化線区の相模線では、同系の新製開始からやや遅れて、1965（昭和40）年にキハ30形が茅ヶ崎運転区（当時）に新製配置され、それ以降、キハ35系は徐々に数を増やし、1982（昭和57）年までには同系に統一され、1991（平成3）年3月に全線電化されるまで活躍しました。このキハ35系は民営化直前の1986（昭和61）年から、「首都圏色（朱色5号）」一色から「クリーム色1号」を基調色とし、「青20号」のラインを入れたカラーに順次塗り変えられ、JR化後には前面窓下に形式番号を斜めに入れるようになりました。トミックスではこのカラーをまとう両運転台のキハ30形をモーター車とトレーラーの2両セットで、片運転台、トイレ付きのキハ35形を同様の2両セットで新たにラインナップいたします。両セットともにトレーラーは、寒地向けの500番代として、屋根やキハ35形は床下周りも違っています。モーター車にはM-13モーターを使用したフライホイール付き動力ユニットを搭載、他の各車には新集電システムを採用し、全車に黒色車輪を使用しています。また、両セットには転写シート（形式車体番号、JRマーク、所属標記）の他、前面表示パーツを付属しています。既売の「キハ35系（首都圏色）」と混結して、塗色変更過渡期や八高線に転属した直後の姿もお楽しみください。

# キハ35系

## ディーゼルカー（相模線色）

- 国鉄キハ300-500形ディーゼルカー（相模線色）セット（2両）  
＜98129＞予価¥14,300（税込）
- 国鉄キハ350-500形ディーゼルカー（相模線色）セット（2両）  
＜98130＞予価¥12,100（税込）

JR東日本商品化許諾済 **1月発売予定**